

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第43集 (2011年度) 2012年3月発行：99-115

なぜ女子の大学進学率は低いのか？ —愛情とお金の間—

藤 村 正 司

なぜ女子の大学進学率は低いのか？

—愛情とお金の間—

藤村正司*

1. はじめに

本稿の目的は、女子の4大進学率の低さの構造を家族の視点から捉えてみることである。このような大学進学機会の性差に関わる課題を設定したのは、何よりも大学進学率が50%を超えるユニバーサル段階では、「大学全入時代」説によって性による不平等が認識されにくくなっている状況がある。「大学全入時代」説は、なるほど、大学に志願する者は、どこかの大学に合格できる。学校基本調査によれば、平成22年3月卒業生の現役志願率は男子が61.7%、女子46.3%。男子大学進学率は51.3%、女子は44.2%だから、男子現役合格率は83.1%、女子は95.4%にもなる。

しかし、「大学全入時代」説が危ういのは、少子化が進行すれば合格率が高まるから所得間格差やジェンダー格差が縮小するという楽観的な観測を生み出していることである。実際、近年の女子の4大進学志向が高いとは言え、男子に比して平成22年現在の進学率で7%ポイント、志願率では15%ポイントも低い。男子の4割、女子の5割は、大学に志願することすらできない。そこでは、夫婦の完結出生児童数が1970年代から現在まで2人前後で安定して推移し、子どもの数2人と3人で9割近くを占める事実は認識されていない。

ユニバーサル化の時代では質保証は喫緊の課題であるが、そこには依然として機会の不平等やジェンダー・ギャップがある。公財政支出の低い日本の大学進学行動の特徴は、親子二人三脚・学力重視型だと言え、これが進学問題を「私的な問題」ととどめてきた。しかし、2人に1人が大学に進学し、合格率90%のユニバーサル化の時代で志願すらできない現代の不幸は「私的な問題」ではなく、「公的な問題」として認識されなければならない。

「私的な問題」を公的イシューとして顕在化するには、学力のみならず、家族に埋め込まれた資源配分のメカニズムを解明する必要がある。再生産論の立場から、家族を学校と同様に階層化のエージェントとして捉えることができるとしても、それがどの程度でどのような基準によって生まれているのかは自明ではない (Hauser & Wong, 1989)。きょうだいの規模だけでなく、きょうだいの生順や男女の構成によって大学進学希望はどのように異なるのか。さらに、大学生のきょうだいの存在によって、利益（不利益）を被っているのは誰なのか。4大進学における家族内の資源配分のメカニズムは、家族内では強く認識されているにもかかわらず、数量分析は少ない。女子の4大進学行動は、依然としてジェンダーのベールに覆われている (中西, 1998; ドュリュ＝ベラ: 訳, 1993)。

* 広島大学高等教育研究開発センター教授

本稿は、次のように構成される。第2節で、家族に関心を寄せる地位達成論と人的資本をレビューしつつ、本稿のねらいを明らかにする。第3節で、高校入学後の学校外教育費の推計を行い、遅く生まれた妹にマイナスの影響を及ぼすことを示す。第4節では、同じ学力水準でも家計所得やきょうだい数によって大学進学希望が異なること、家族内では長子（第二子）の就学状況と第二子（第三子）の大学進学希望の間に連鎖が存在することを示す。

最後に、第5節で、学費負担についての親の考え方が大学進学希望と大学進学にかかる学費に及ぼす影響を検討する。貸与奨学金をめぐる親の愛他的意識が娘の大学進学機会を阻害すること、学費負担は「本人の責任」だとする親の態度が学費を減じていることなどが明らかにされる。資源制約下における女子の4大進学／非進学の構造を、家族というもつとも身近でダイナミックな制度から探り当てるのが、本稿のねらいである。

2. 大学進学における家族構成の重要性と先行研究

きょうだいは、家族に関心を寄せる地位達成モデルや人的資本論にとって重要な変数である。しかし、きょうだいの構造は比較文化的にも技術的にも単純ではない。だが、家族の財政的基盤をなすきょうだいには三つの側面があると見てよい（Steelman & Powell, 1991；Steelman et.al., 2002）。第1はきょうだい数（sibling size）という「量的な面」。第2は生順（sibling position）という「質的・文化的な面」。第3は、第2と関わってきょうだいの男女構成（sex configuration）や就業・就学状況からみた「関係的な面」である。大学進学行動も、きょうだいに関わるこれら三つの側面の影響を受けていると捉えることができる。

きょうだいの規模は、家計を稀釈化させるから、多くの先行研究が明らかにしたように教育投資や地位達成に与える効果はマイナスである（Blake, 1989；近藤, 1996；片岡, 2001；平沢, 2004；片瀬・平沢, 2008；平尾, 2008；藤村, 2009）。少子化の文脈であれ、親の教育戦略であれ、きょうだい数の多い家族に生まれた子どもは教育機会に恵まれない、というのが実証分析から得られた成果である。反面で、きょうだい間には、地位達成の上で類似性や互惠性が認められる（Griliches, 1979；Hauser & Wong, 1989）。きょうだい個々の能力の違いがあるにしても、親は不利な子どもを償おうとするからである。そこでは共有する財を分かち合う家族の特質が強調されている。

一方、出生順位は、親の職業と教育達成の関連を分析したブラウとダンカンによる長子と末子の有利説があるが（Blau & Duncan, 1967, p.307）、その後のアメリカの調査では出生順位は期待される程（第一子に対する親の強い期待）には教育達成に有意な影響を及ぼしていない（Butcher & Case, 1994）。むしろ、出生順位は、長子相続制と儒教倫理の伝統と関わって、日本の階層研究者の間で関心が寄せられてきた（安田, 1971；佐藤, 2004）。

出生順位よりも地位達成に有意な影響を及ぼすのは男女構成であるが、きょうだい間の年齢差とともに未開拓の分野である（Steelman et.al, 2002）。数少ない先行研究として、エイリヒが教育機会の不平等は家族間の男女ではなく、同じ家族の息子と娘の間にあることを実証したことは、本稿と関わって重要な知見である（Eirich, 2010）。

生順と男女の構成が教育達成や収入に及ぼす効果については、所得制約の下で子どもの質と量のトレード・オフの関係に焦点をしぼる「家族の経済学」に理論的・実証的研究の蓄積がある (Becker, 1984; Hanushek, 1992; Ermisch, 2003; Kantarevic & Mechoulan, 2006; 戸田, 2010)。ブッチャーとケースは、女子にとって兄 (姉) の存在が教育達成にプラス (マイナス) の影響をもたらすことから、男子に比して低い女子の収益率の推計にバイアスのあることを示唆している (Butcher & Case, 1994)。他のきょうだいの動向が、本人の地位達成に与える影響として有益な視点である。また、家族内では愛他的行動 (altruism) の方が利己主義より効率的であるというベッカーの指摘は、地位達成論が明らかにしたきょうだい間の相関の高さと通底する (Becker, 1991, p.194)。親が子どもに投資 (生前贈与) するのは子どもの質から私的な効用を得るからだが、そこには子どもの選好を受動的に受け入れる親の愛他的行動がある。

だが、青年期については、親の純粋な愛他的行動というより父権主義 (paternalism) や利己主義など、多様な動機がある (Berhman, Pollak & Taubman, 1995; 末富, 2005, 2011)。ただし、そうした多様な親の動機や構えがどのように、誰に、どの程度まで大学進学希望や教育費の負担に影響を与えているのかは、日本のデータは明らかにされていない。教育投資論は、大学教育への投資の見返りを収益率で計測してきたが、学費負担を直接規定する条件については十分に検証されてこなかった (島, 1999)。本稿で大学進学希望や費用負担の推計に保護者の負担意識を効用関数のパラメータ指標として加えるのは、資源制約下で、どのように親が家族内で資源の配分を行っているのか把握できると考えるからである。地位達成モデルや人的資本論は、きょうだいの構造や学費負担に対する親の態度や構えを変数に加えることで、新たな展開が期待できると考える。

3. 家族内の資源配分のメカニズム

高校入学後の学校外教育費

以下で、家庭内の資源配分のメカニズムを明らかにする。推計には、2005年11月に全国の高校3年生4,000人 (男女各2,000) を対象に実施された「全国高校生調査」とその一環としてなされた保護者票を使用する (東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター, 2007)。取りかかりとして、保護者票から学校外教育費の規定要因を推計する。高校生の進路調査の多くは、高校生本人の進学希望をベースにしている。この調査の利点は、保護者調査票から家族の情報が得られることである。

この調査において、学校外教育費とは、「高校に入ってから進学塾や家庭教師などにかけた費用 (月額)」である。なお、保護者票には中学3年次の教育費も聞いているが、「かけていない=0円」は18%に過ぎない。ところが、高校に入ってから学校外教育費を「かけていない=0円」は、全体の59%を占める。高校入学後の学外教育費は、卒業後に進学しない者や学力選抜によらない進学予定者を含む「制限従属変数」と見ることができる。そこで、以下の分析ではOLSではなく、端点解の偏りを修正するトービット・モデルを適用する。説明変数のきょうだいについては、きょうだいの「質的・文化的側面」を指標化するために、生順ときょうだい数を組み合わせた「生順相対指標」

(生順÷(きょうだい数+1))を用いる(Steelman & Powell, 1991, p.1514)。表1に示すように、「生順相対指標」は同じ生順でもきょうだい数が多いほど値は小さくなり、同じきょうだい数でも遅く生まれた者ほど値は大きくなる。

表1 生順相対指標

生順	きょうだい数				
	1	2	3	4	5
1番目	0.50	0.33	0.25	0.20	0.17
2番目		0.67	0.50	0.40	0.33
3番目			0.75	0.60	0.50
4番目				0.80	0.67
5番目					0.83

「生順相対指標」の予想される符号条件はマイナスである。人的資本論と比較文化的視点から、早生まれ子どもに資源がより多く配分されると予想することは許されるだろう(Becker, 1981; Behrman & Taubman, 1995; Brinton, 1988)。表2には、学校外教育費を被説明変数とし、中学成績順位(下の方～上の方の5段階)、両親教育年数、両親年収、きょうだい数、「生順相対指標」を説明変数としてモデル1とし、モデル2には保護者の「大学進学希望ダミー」を加えたトービット推計値を性別に示した。

表2 高校入学後の学校外教育費(月額)のトービット推計値

	男子		女子	
	model1	model2	model1	model2
中3成績順位(1~5)	3.373***	2.619***	3.304***	1.896***
父教育年数	1.058**	.612 ⁺	1.072***	.605*
母教育年数	1.213*	1.060*	1.379***	1.089**
両親年収(100万円)	1.097***	.922*	.673***	.478**
きょうだい数	-2.258**	-2.089*	-2.746**	-2.070**
生順相対指標	2.284	2.358	-9.359**	-7.910**
大学進学希望ダミー 定数	-101.887***	10.759*** -97.491***	-79.554**	10.712*** -72.735***
疑似R ²	.017	.022	.017	.024
対数尤度	-3,776	-3,373	-5,117	-5,080
N	664	664	855	855

有意水準：⁺p<10%, *p<5%, **p<1%, ***p<0.1%

表1より、中3成績順位、両親年収、きょうだい数は、ほぼ予想された結果を示している。モデル1では、中学3成績順位が1ランク高いと学外教育費は、男子で月額3,373円ほど高くなる。学力の高い子どもを持つ親は、子どもの学力をさらに高めるため負担を惜しまない。また、大学進学希望ダミーを投入したモデル2は、大学進学希望を持つ親の出費はそうでない親より男女ともに月額で10,700円程度高い学校外教育費を支払っている。

しかし、きょうだい数は他の条件を制御してもなお、マイナスの符号条件で統計的に有意な係数を持つ。きょうだいが多いと、モデル2では男女ともに月額2,000円程度学外教育費が少なくなる。さらに、「生順相対指標」は、女子についてマイナスの符号条件で統計的に有意な係数を持つ。高校入学後の娘に対する学外教育費は、親の大学進学希望の有無にかかわらず、遅く生まれた者ほど少ない。女子に対して生順による選択的な投資が行われていることを示す結果である。

遅く生まれた娘の4大進学希望は縮む

それでは、4大進学希望に家族構成はどのような影響を持つのか。図1に、所得階級ときょうだい数によって大学進学希望の変化を学力水準別に示した。学力の意外な効果が発見される。縦軸は親の大学進学希望の割合、横軸は所得5分位（Ⅰ≦450万、450万<Ⅱ≦600万、600万<Ⅲ≦800万、800万<Ⅳ≦1,000万、1,000万<Ⅴ）ときょうだい数（1人～4人以上）である。

まず、所得と4大進学希望の関係を見よう。予想されるように、男女とも高学力層(中3成績「上」)では所得に関係なく進学希望は高い。所得の影響が著しいのは、学力「中」以下である。大学に進学できる学力「中」を見ると、所得が高くなるほど急激に親の大学進学希望が高まる。学力「中くらい」が、家計所得の影響を敏感に受ける“限界高校生”と言ってよい。

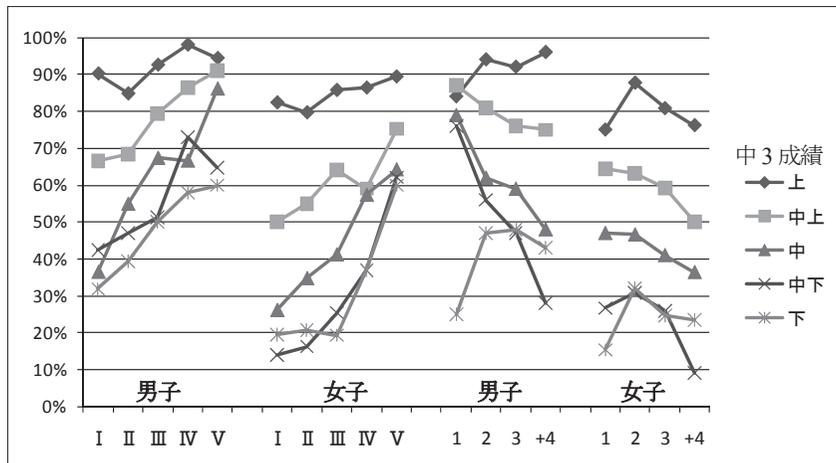


図1 所得階級ときょうだい数からみた保護者の4大進学希望

興味深いのは、女子について学力間で4大進学希望格差が際だって大きいことである。学力「上」と「中の上」の進学希望を比べると、第Ⅲ分位で男子は10%、女子は20%の開きがある。女子の場合、男子以上に学力が高くなければ、親は進学を希望しない傾向にある。逆に言えば、学力がありながら所得水準が低いために4大進学を断念し、短期高等教育機関に進学する層が存在するということである。そうだとすれば、女子学生の学力と家計所得は男子学生よりも高いと言える。

実際、2007年3月に実施した追跡調査では、大学入学を確定した高校生の平均学力と平均所得は、私立大学に限れば、女子の平均学力は3.70、男子は3.42 (t = 4.445, p < 0.1%)。平均所得は女子が904

万円, 男子は853万円 ($t=2.660, p<1\%$)。学力・所得水準ともに女子の方が高い。

次いで, きょうだい数と学力(中3成績順位)によって4大進学希望がどのように変化するか見よう。稀釈化説によれば, きょうだい数が多いほど4大進学希望は小さくなる。しかし, 学力別にみれば, 著しく異なる。男女ともに, 成績「上」は, きょうだい数に関わりなく4大進学希望が高い。ところが, 成績「中の上」以下になると, きょうだいが多いほど4大進学希望は縮んでいる。とくに男子の学力「中」は, きょうだい数が増えると進学希望は激減する。他方, 女子は男子に比して学力間の差が大きい。そのことは, 独り子で顕著である。進学に有利な独り子は, 男子の場合, サンプルの少ない学力「下」を除いて学力に関係なく進学希望は80%前後である。だが, 女子の場合, 独り子でも進学希望は学力によって大きな差がある。学力が女子にとって進学の鍵を握っていると言えるが, なぜそうなるかは女子の「謎」である。以下で, 4大学進学志望の三つの制約条件(学力, 所得, きょうだい)の影響をロジット推計で計測する。

表3に, 推計結果を示した。投入した変数は, 期待される符号条件を示している。中3成績と所得はプラス, きょうだい数はマイナスの符号条件で有意な係数を持つ。学力の係数を男女で比較すれば, 女子の方がやや大きい。女子は中3成績順位が一ランク上がれば, 4大進学を希望する傾向がオッズ比にして2倍(保護者1.905, 本人1.902)になる。きょうだい数の回帰係数は女子で大きく, きょうだい一人増えると大学進学を希望する傾向はオッズ比にして保護者で7割(0.716), 本人で6割(0.635)まで減じる。

さらに, 「生順相対指標」は, 女子のみ5%水準で有意な係数を持つ。女子は他の変数を制御してもなお, 遅く生まれた者ほど大学進学を希望しにくい。1985年SSM調査を用いた近藤と同じ結果が得られる(近藤, 1996)さらに, 女子の「生順相対指標」の回帰係数は, 本人よりも保護者で大きい。なお, 遅生まれの子が学力の高い場合の効果を見るため, 中3成績と「生順相対指標」の交互作用項を投入したが, 良好な結果は得られない。

表3 保護者と高校生からみた4大進学希望のロジット推計値

	保護者				高校生本人			
	男子		女子		男子		女子	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
中3成績順位(1~5)	.604***	1.829	.644***	1.905	.594***	1.811	.643***	1.902
父教育年数	.272***	1.312	.210***	1.234	.250***	1.284	.190***	1.210
母教育年数	.154**	1.167	.213***	1.237	.163***	1.177	.176***	1.192
両親年収(100万円)	.116***	1.123	.096***	1.101	.094***	1.099	.085***	1.089
きょうだい数	-.219**	.803	-.335***	.716	-.254**	.775	-.453***	.635
生順相対指標	-.572 ⁺	.564	-.931**	.394	-.150	.861	-.660*	.517
定数	-6.778***	.001	-7.141***	.001	-6.813***	.001	-6.404**	.002
Nagelkerke R ²	.314		.338		.303		.318	
N	1,800		1,802		1,800		1,802	
-2LL	1,720		1,961		1,857		2,005	

有意水準: ⁺p<10%, *p<5%, **p<1%, ***p<0.1%

きょうだいの進学連鎖

本項で、他のきょうだいの就学状況が、本人の大学進学希望にどのような影響を与えるのか検討する。具体的には、きょうだい数と生順を特定し、長子ないし第二子が「大学院生・大学生・浪人」か「非大学生」（働いている、アルバイト、無職、短大・高専・専門学校生）によって、弟妹に対する大学進学／非進学希望がどのように関連するかをみる。なお、「働いている、アルバイト、無職」（全体の24%）は、本人と長子の年齢差が4歳以上ある場合、大卒が含まれるケースがある。

過小推定を了解した上で、表4に、(1) 2人きょうだい人の場合の、長子の就学状況と第二子の進学希望、(2) 3人きょうだいの場合の、長子の就学状況と第二子の進学希望、そして(3) 3人きょうだいの、第二子の就学状況と第三子（末子）の進学希望のクロス集計を示した。オッズ比はいずれも2を超えるから、兄姉が大学生であれば、そうでない場合よりも弟妹は大学を希望しやすいことがわかる。ただし、そこには性による違いがある。男子の場合、長子が大学生であれば第二子も大学生を希望する者が多いときに、女子は長子が非大学であれば非大学を希望する人数が多い。そうした就学状況によるきょうだい間の類似性は、2人きょうだい・第二子の男子（保護者票）と3人きょうだい・第二子の女子（本人票）に顕著である。

表4 兄姉の修学状況と弟妹の大学進学希望の関連

(1) 2人きょうだい（本人：第二子）

		保護者票				本人票			
		男子		女子		男子		女子	
第二子	長子	進学	非進学	進学	非進学	進学	非進学	進学	非進学
		大学生	189	32	139	72	182	39	128
非大学生	104	110	96	151	96	118	87	160	
		odd=6.2		odd=3.0		odd=5.7		odd=2.8	

(2) 3人きょうだい（本人：第二子）

		男子				女子			
		進学	非進学	進学	非進学	進学	非進学	進学	非進学
第二子	長子	87	24	76	55	87	24	75	56
		72	63	33	91	67	68	21	103
		odd=3.1		odd=3.8		odd=3.6		odd=6.5	

(3) 3人きょうだい（本人：第三子）

		男子				女子			
		進学	非進学	進学	非進学	進学	非進学	進学	非進学
第二子	第三子	63	10	65	28	60	13	61	32
		90	68	52	101	93	65	46	107
		odd=4.7		odd=4.5		odd=3.2		odd=4.4	

もつとも、きょうだい間で学歴が似かよってくると言えるか否かは、本人の学力や家庭環境を制御した上で判断しなければならない。表5に、(1), (2), (3) それぞれのサンプルについて長子（第二子）大学生ダミーを加えたロジット推計値を示した。

表5から、3つのケースは学力や所得・階層変数を制御してもなお、兄姉の就学状況は大学進学希望に対し、統計的に有意な係数を持つことがわかる。兄姉が大学生であれば、家庭環境にかかわらず、第二子・第三子に対する親の大学進学希望が高まる。全体としてみれば、きょうだいが多いほど、遅く生まれたほど大学進学機会が閉ざされる傾向にあるが、他のきょうだいの動向を加えると

表5 兄姉の就学状況が弟妹の大学進学希望に与えるロジット推計値

(1) 2人きょうだい (本人：第二子)

	保護者				本人			
	男子		女子		男子		女子	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
中3成績順位	.488 ***	1.629	.575 ***	1.777	.596 ***	1.815	.613 ***	1.847
父教育年数	.256 ***	1.292	.149 *	1.161	.255 ***	1.290	.156 ***	1.169
母教育年数	-.013	.987	.128	1.137	-.053	.949	.143 †	1.154
両親年収 (100万円)	.129 **	1.137	.090 *	1.094	.064	1.066	.059 †	1.061
長子大学生ダミー	1.374 ***	3.952	.887 ***	2.429	1.331 ***	3.783	.509 *	1.663
定数	-5.800 ***	.003	-6.847 ***	.001	-5.154 ***	.006	-6.852 ***	.001
Nagelkerke R ²	.394		.327		.377		.293	
-2LL	368		449		378		462	
N	391		407		391		407	

(2) 3人きょうだい (本人：第二子)

	保護者				本人			
	男子		女子		男子		女子	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
中3成績順位	.678 ***	1.969	.334 *	1.396	.621 **	1.862	.451 **	1.570
父教育年数	.244 **	1.276	.295 **	1.343	.100	1.105	.248 **	1.281
母教育年数	.065	1.067	.297 *	1.346	.214	1.239	.143	1.153
両親年収 (100万円)	.091 †	1.096	.054	1.056	.090 †	1.094	.041	1.042
長子大学生ダミー	1.120 **	3.065	1.109 **	3.032	1.145 **	3.141	1.470 ***	4.249
定数	-6.901 ***	.001	-10.698 ***	.000	-6.790 ***	.001	-8.596 ***	.000
Nagelkerke R ²	.335		.421		.305		.406	
-2LL	255		226		235		226	
N	221		233		221		233	

(3) 3人きょうだい (本人：第三子)

	保護者				本人			
	男子		女子		男子		女子	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
中3成績順位	.657 ***	1.928	.571 ***	1.771	.594 ***	1.812	.553 ***	1.739
父教育年数	.415 ***	1.515	.222 **	1.248	.299 **	1.349	.236 **	1.260
母教育年数	-.089	.914	.060	1.062	-.006	.994	-.019	.981
両親年収 (100万円)	.022	1.023	.113 **	1.119	.052	1.053	.051	1.052
第二子大学生ダミー	1.077 **	2.935	.703 *	2.021	.773 *	2.166	1.163 ***	3.200
定数	-6.219 ***	.002	-7.107 ***	.001	-5.673 ***	.003	-5.986 ***	.003
Nagelkerke R ²	.384		.333		.315		.320	
-2LL	206		253		217		254	
N	216		231		216		231	

有意水準：† p<10%, *p<5%, **p<1%, ***p<0.1%

親は弟妹を平等に扱おうと希望する。本人も大学生の兄姉と対等でありたいと希望するから、きょうだい間のライバル関係を読むこともできる。きょうだい間の地位達成の類似性を指摘するアメリカの実証分析と同じ結果が、日本のデータからも観察される (Griliches, 1979; auser & Wong, 1989)。

ただし、そこにはジェンダー・ギャップがある。保護者は、兄姉が大学に進学していれば、妹にも大学進学を希望する傾向がオッズ比にして2倍から3倍高くなるときに、弟には3倍から4倍近くになる。保護者票から、弟の方がきょうだい間で進学機会の連鎖が強い。他方、本人票を見れば、様子が異なる。3人きょうだいでは、いずれも妹の方が弟よりも「大学進学ダミー」の回帰係数は大きく、かつ保護者の係数より大きい。3人きょうだいの第二子と第三子の妹の大学進学希望は、上の兄姉の就学状況に左右されやすいと言える。ただし、表4のクロス表と重ね合わせると、弟は大学生の兄姉に、妹は非大学の兄姉により親和的である。家族が平等化装置であるというのは、弟について該当する。親は資源配分に伴う平等と効率のジレンマを生順とジェンダーによって解消するが、社会的には加熱と冷却による自己選抜が働いていると解釈できる。

なお、結果は示さないが、独り子の場合、男女ともに両親年取は統計的に有意な係数は持たないこと、女子の場合、保護者と本人ともに中3成績順位が統計的に有意でかつ男子に比して大きな回帰係数をもつことを指摘しておく。

4. 学費負担に対する親の構えとその影響

愛他的意識は、女子の大学進学希望を抑制する

ユニバーサル段階における学費負担のあり様は、国によるコンテキストの違いはあれ、政府や納税者から親や本人が負担すべきというコスト・シェアリングの考え方が国際的に定着している (Johnstone, 2006)。わが国では政府による学生支援は、貸与奨学金である。したがって、貸す側には100%回収が期待できないデフォルトがあるが、借りる側にもリスクがある。バーが指摘したように、大学教育はマイホームや自動車の購入と異なって何を買っているのか分かりにくい不確かさがある (Barr, 2001, p.175)。マイホームや自動車の購入は、返済が滞れば売却のオプションがある。だが、学歴は途中で売却して負債を軽減できない。

本節ではこの揺らぎを捉えるため、新たに二つの変数を用いる。一つは、学費負担に対する保護者の意識をダミー変数としてモデルに追加したことである。保護者の考え方は、調査票で進学にかかる学費について意見を聞いている。(1)「卒業するまでの学費・生活費は親が負担するのが当然だ」【親の責任】(平均48.0%)、(2)「返済が必要な奨学金は将来に子どもの負担となるので、借りたくない」【愛他主義】(平均40.5%)、(3)「学費や生活費は奨学金やローンでまかない、本人が就職してから返すべきだ」【本人の責任】(平均37.5%)の三つである(「強くそう思う」と「そう思う」=1、「そうは思わない」と「全くそうは思わない」=0)。ここで(2)の設問内容は親のローンに対するリスク回避志向というよりも、「子どもに苦勞をかけたくない」とする親心と解釈する。【親の責任】は、親子の強い絆(生前贈与)と言い換えてもよい。第二は、被説明変数として多重回答「大学進学の可能性あり」(平均67%)を加えた。大学進学か否(短大・専門学校)かで揺れている保

護者を捉えるためである。

表6に、意識変数が有意な回帰係数を持つ女子のロジット推定値を示した(男子は略)。**【愛他主義】**は、両親年収などを制御してもなお、二つの被説明変数に対してマイナスで統計的に有意な回帰係数を持つ。貸与奨学金制度は、子どもの将来の幸福を願って卒業後の負債を回避しようとする親心を引き起こすが、そのことはたしかに娘の4大進学希望を抑制する。それは、「大学進学の可能性あり」を被説明変数とした場合、愛他主義的性向は0.1%水準でマイナスの有意な係数を持つ。さらに、統計的に有意ではないが、「大学進学の可能性あり」に対して、**【親の責任】**はマイナス、**【本人の責任】**はプラスの影響を及ぼす。学費負担を親の責任とみない、言い換えれば**【本人の責任】**として捉える親の構えは、可能性として4大進学はあり得ると見る傾向にあると言える。

表6 親の学費負担意識が大学進学希望に及ぼす影響：女子

	(1) 大学進学の可能性あり				(2) 大学進学が最も望ましい					
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
親の責任ダミー	-.195 ⁺	.823			-.172	.842				
愛他主義ダミー			-.454 ^{***}	.635			-.243 [*]	.784		
本人責任ダミー				.220 ⁺	1.246				.080	1.083
Nagelkerke R ²	.332		.302		.332		.330		.340	
-2LL	1,903		1,822		1,902		1,985		1,984	
N	1,801		1,800		1,800		1,800		1,800	

有意水準：⁺p<10%, *p<5%, **p<1%, ***p<0.1%

中3成績順位, 両親教育年数, 両親年収, きょうだい数, 生順相対指標で調整済み。

それでは、そうした娘の将来の負債を回避しようとする親の愛他主義的性向は、どのような生順に生まれ落ちた娘の大学進学希望を抑制するのであろうか。表7に、データをきょうだい数と生順にブレイクダウンし、**【愛他主義】**の効果を計測した結果を示した。表7より、**【愛他主義】**が統計的に有意な係数を持つのは、一人娘と3人きょうだいの上と下に挟まれた第二子である。ここでは、他の変数を制御してもなお、愛他的な親はそうでない親よりも大学進学を希望する傾向がオッズ比にして3割程度にとどまる ($e^{-1.149}=0.317$, $e^{-1.239}=0.290$)。3人きょうだいの末子は、「大学進学が可能

表7 生順ときょうだい数別にみた愛他主義の影響

きょうだい数	生 順		
	長女	第二子	第三子
1人	-1.055 [*] -1.034 [*]		
2人	-0.067 -0.327	0.223 -0.228	
3人	-0.424 -0.320	-1.149 ^{**} -1.239 ^{***}	-0.562 ⁺ -0.731 [*]

上段は「大学進学が最も望ましい」を被説明変数とした回帰係数(b)。

下段は「大学進学の可能性あり」を被説明変数とした回帰係数(b)。

有意水準：⁺p<10%, *p<5%, **p<1%

中3成績順位, 両親教育年数, 両親年収で調整済み。

性あり」を被説明変数とした場合、マイナスで有意に転じる。一時点の分析に過ぎないが、ローンに対する親の愛他的な構えや態度が、独り長女と3人きょうだいの第二子及び第三子の4大進学希望の制約条件になっているのである。

予想学費負担の規定要因

前項で、親の愛他主義的性向が女子の大学進学希望を制約することを見た。それでは、そうした愛他的な親の構えや態度は、進学にかかる学費の負担にどのような差違をもたらしているのだろうか。一般に、親は大学進学にかかる費用をあらかじめ想定していると考えてよい。最後に、4大進学を希望する保護者に分析対象をしばって、予想学費負担の規定要因を分析する。学費の予想金額は、親として最も希望する進学先にかかる(1)予想授業料と(2)予想生活費(月額)に、家庭として負担可能な割合をそれぞれ乗じた値である(小林, 2007)。予想授業料の推計モデルには、表2で投入した説明変数に希望進学先の設置者(私立大学ダミー)と二つの学部ダミー(理系と医歯薬系)を、予想生活費に対しては自宅外通学ダミーと高校生の居住について2つの都市ダミーを追加した。

表8に、予想授業料と予想生活費に及ぼす影響の推計結果を示した。期待されるように、両親年収は授業料と生活費ともに有意な影響をもつ。しかし、きょうだい数は、男子のみマイナスで有意な係数をもつ。大学進学への期待の強い男子だが、それだけにきょうだいが一人増えると授業料で月額3,079円、予想生活費では通学形態や居住地にかかわらず、学費を月額4,617円押さえているこ

表8 親が最も希望する大学の予想学費(月額)に与える影響

	(1) 予想授業料		(2) 予想生活費	
	男子	女子	男子	女子
中3成績順位	-1.181	-1.392	-.115	1.510 ⁺
父教育年数	1.293 [*]	.138	.824 ⁺	.564
母教育年数	-.430	.208	.545	-.422
両親年収(100万円)	2.333 ^{***}	1.978 ^{***}	2.061 ^{***}	2.407 ^{***}
きょうだい数	-3.079 [*]	-1.475	-4.617 ^{***}	-1.564
生順相対指標	-7.563	-18.546 ^{**}	-2.317	2.950
親の責任ダミー	6.994 ^{**}	8.847 ^{***}	10.841 ^{***}	11.278 ^{***}
愛他主義ダミー	.618	3.772	3.298 ⁺	5.186 [*]
本人責任ダミー	-14.129 ^{***}	-10.458 ^{***}	-9.420 ^{***}	-6.436 ^{**}
私立大学希望ダミー	28.642 ^{***}	21.885 ^{***}		
理系学部希望ダミー	6.185 ^{**}	4.705		
医歯薬系希望ダミー	19.334 ^{***}	17.786 ^{***}		
自宅外通学希望ダミー			27.971 ^{***}	28.311 ^{***}
中都市ダミー			1.891	6.336 [*]
小都市・郡部ダミー			5.396 [*]	7.195 ^{**}
(定数)	42.727 ^{***}	55.975 ^{***}	19.150 [*]	11.246
Adj.R ²	0.263	0.178	0.272	0.270
N	1,266	970	1,276	971

有意水準：⁺p<10%, ^{*}p<5%, ^{**}p<1%, ^{***}p<0.1%。私立大学希望ダミーの基準は、国公立大学。都市ダミーの基準は、大都市圏(東京特別区と14政令指定都市)。希望学部ダミーの基準は、文系学部。

とがわかる。一方、女子に対して「生順相対指標」は頑強である。「生順相対指標」は、授業料に対してマイナスで有意な影響を与えている。同じきょうだい数でも遅く生まれた妹ほど、親は授業料の安い大学・学部を希望すること、言い換えれば国立大学・文系学部に進学させようとする意図が強いことを予想させる。表2で示した高校入学後の学校外教育費と同様の結果が得られる。

それでは、親の学費負担に対する意識はどうであろうか。【親の責任】(卒業するまでの学費・生活費は親が負担するのが当然)と考える親は、予想されるように授業料と生活費ともにプラスの有意な影響を持つが、女子は男子よりやや高い費用を要する。貸与奨学金について【愛他主義】的傾向を持つ親は、女子の生活費のみプラスで統計的に有意な係数を持つ。しかし、学費負担は【本人の責任】だとする親の態度は、授業料と生活費ともにマイナスの有意な係数を持つ。男女で比べると、親は娘に対して庇護的である。二つの都市ダミーの有意な効果も含めれば、親は4大進学希望の娘について高い学費を予想していることを示す結果である。

5. おわりに

本稿は、2006年11月に実施された「全国高校生調査」を用いて、女子の大学進学を家族の視点から探った。注目した制約条件は、学力、所得、きょうだい、そして学費負担に関する親の態度である。一時点の分析であるが、保護者調査を用いることで、家族内の資源配分のメカニズムを明らかにした。

まず、指摘しておくべきことは、ユニバーサル化の段階でも、同じ学力でありながら、所得やきょうだい数によって大学進学／非進学が左右されることである。わけても、学力「中くらい」の高校生は、大学進学／非進学の分岐点に立つ“限界高校生”である。また、女子の4大進学希望は、男子に比して学力による格差が著しく大きいことが特徴である。

ただし、なぜそうなるのかは、女子の「謎」である。その「謎」を解く鍵は、家庭内の資源配分の基準にあり、それが生順によって選択的に行われていることである。家族の属性や本人の学力を制御してもなお、遅く生まれた者ほど高校での学校外投資や大学進学機会が閉ざされ、また入学後の授業料負担が抑制される傾向にあること、そしてその不利益は妹に向けられている。さらに、兄弟の就学状況と弟妹の大学進学／非進学の間には関連があり、親は第一子(第二子)が大学生であれば、第二子(第三子)も高学歴を希望しやすい。そうしたきょうだい間の進学連鎖＝資源の平等化は、妹よりも弟で強い。この進学連鎖が、男子の大学進学行動の高さを説明するといえるのかもしれない。加えて、親の学費負担に対する態度がある。ローンに対する親の愛他的傾向は、大学進学か否かで揺れる娘の4大進学希望を抑制し、学費負担に関わる親の構えは家族構成や個人の属性を統制してもなお、入学後に想定される学費に影響を与えている。

このように女子の4大進学率が男子に比して低いのは、親が希少な資源をジェンダーと生順という二つの基準で選択的に配分すること、さらにローンを回避しようとする親の愛情がある。その庇護を受けているのは、独り娘と上と下に挟まれた妹である。

とは言え、日本経済の長期低迷によって中流層に対する継続的な賃金削減は、否応なしに貸与奨

学金への依存を高め、学費負担の責任を子どもに転嫁しやすい環境を生みだしている。収入増に自信が持てない中流層の下流化は、経済的支援を欠いた自立を子どもに迫るが、そのことが次世代の大学進学機会や学生生活（両角，2011），ひいては経済的自立に影を落としている。

大学進学率50%のユニバーサル段階とはいえ、進学可能な学力があるにもかかわらず、生まれ落ちた家族や生順によって選択の自由が保障されない。この古典的事実が、男子に比して低い女子の大学進学率の理由である。

【付記】

データは、平成17～平成21年度文部科学省科学研究費・学術創成による「全国高校生調査」（代表・金子元久）を使用した。記して謝意を表したい。

【参考文献】

- 片岡栄美（2001）「教育達成過程における家族の教育戦略」『教育学研究』第68巻，第3号，259-273頁。
- 小林雅之（2007）「親の教育費負担」東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター・ワーキングペーパー，http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/crump_wp_no21.pdf
- 小林雅之（2009）『大学進学の世界』東京大学出版会。
- 近藤博之（1996）「地位達成と家族」『家族社会学研究』No.8，19-31頁。
- 佐藤香（2004）『社会移動の歴史社会学』東洋館出版社。
- 島一則（1999）「親と大学生の学生生活費負担に関する実証的研究」『高等教育研究』第2集，177-200頁。
- 末富芳（2005）「教育費スポンサーとしての保護者モデル再考」『教育社会学研究』第77集，5-25頁。
- 末富芳（2011）「大学生の親の教育費負担：親負担ルールの現状と将来」『季刊家計経済研究』No.91，33-40頁。
- マリー・デュリュ＝ベラ（中野知津訳）（1993）『娘の学校』藤原書店。
- 東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター（2007）『高校生の進路追跡調査 第一次報告書』。
- 戸田淳仁（2010）「子どもの数・出生順位と教育との関係：子どもの質・量のトレードオフに関する実証分析」『季刊家計経済研究』No.88，28-40頁。
- 中西祐子（1998）『ジェンダー・トラック』東洋館出版社。
- 平沢和司（2004）「家族と教育達成：きょうだい数と出生順位を中心に」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容』東京大学出版会，327-346頁。
- 平沢和司・片瀬一男（2008）「少子化と教育投資・教育達成」『教育社会学研究』第82集，43-57頁。
- 平尾桂子（2008）「人口変動とジェンダー・家族」『教育社会学研究』第82集，89-106頁。
- 藤村正司（2009）「大学進学における所得格差と高等教育政策の可能性」『教育社会学研究』第85集，

- 27-48頁。
- 両角亜希子 (2011) 「大学生の生活・学習と経済状況」『季刊家計経済研究』No.91, 22-32頁。
- 安田三郎 (1971) 『社会移動の研究』東京大学出版会。
- Barr, N. (2001). *The Welfare State as Piggy Bank*. Oxford: Oxford University Press.
- Becker, G. (1991). *A Treatise on the Family*. Cambridge: Harvard University Press.
- Behrman, J., Pollak, R., & Taubman, P. (1995). *From Parent to Child*. Chicago: University of Chicago Press.
- Behrman, J., & Taubman, P. (1995). Birth Order, Schooling and Earnings, in Behrman et. al. (Eds.), *From Parent to Child* (pp.87-109). Chicago: University of Chicago Press.
- Blake, J. (1989). *Family Size and Achievement*. Berkeley: University of California Press.
- Blau, P., & Duncan, O. (1964). *The American Occupational Structure*. New York: John Wiley.
- Brinton, M., (1988). The Social-Institutional Bases of Gender Stratification: Japan as an Illustrative Case, *American Journal of Sociology*, 94(2), 300-334.
- Butcher, K., & Case, A. (1994). The Effect of Sibling Sex Composition on Women's Education and Earnings, *Quarterly Journal of Economics*, CIX(3), 321-563.
- Eirich, G. (2010). Educational Inequality between Brothers and Sisters in the United States, *International Journal of Education*, 2(2), 1-16.
- Ermisch, J. (2003). *An Economic Analysis of the Family*. Princeton: Princeton University Press.
- Griliches, Z. (1979). Sibling Models and Data in Economics: Beginnings of a Survey, *Journal of Political Economy*, 87(5), 37-64.
- Hanushek, E. (1992). The Trade-off between Child Quantity and Quality, *Journal of Political Economy*, 100, 84-117.
- Hauser, R., & Wong, R. (1989). Sibling Resemblance and Intersibling Effects in Educational Attainment, *Sociology of Education*, 62, 149-171.
- Johnstone, D. (2006). *Financing Higher Education*. Rotterdam: Sense Publishers.
- Kantarevic, J., & Mechoulan, S. (2005). Birth Order, Educational Attainment, and Earnings: An Investigation Using the PSID, *Journal of Human Resources*, 41(4), 755-777.
- Steelman, L., & Powell, B. (1991). Sponsoring the Next Generation: Parental Willingness to Pay for Higher Education, *American Journal of Sociology*, 96(6), 1505-1529
- Steelman, L., Powell, B., Werum R., & Carter, S. (2002). Reconsidering the effects of sibling configuration: recent advances and challenges, *Annual Review of Sociology*, 28, 243-269.

Why is Women's Access to University Low?: The choice between love and money

Masashi FUJIMURA *

Why has the percentage of women enrolled at university always been lower than that of men, even at a time of universal provision? Although the differences in participation rates between men and women have been well documented, less is understood about why this is so. The aim of this paper is to investigate the structure of university attendance in Japan from the viewpoint of sibling order and sex. Using the 2005 National High School Parent Survey, the effects of ability, parental income, the number of siblings, birth order, and parental altruistic attitude towards university attendance and expenditure, were investigated. The parental survey sought information on family background, and included questions relating to parents' willingness or obligations in paying for the education of their 18 year-old children. Although the extent to which parents invest in their children has long been recognized as integral to status attainment or human capital theory, that investment has rarely been examined directly. Special emphasis was placed on the role of two parameters: the number of siblings and their birth order, and parents' altruistic attitude. The major findings are as follows:

(1) Resource-dilution hypothesis was supported by the data. There was an inverse relationship between the number of siblings and out-of-school expenses, and to an aspiration to attend college, which were attributed to a reduction in the availability of family resources available for each child. (2) An examination of the effect of birth order proved that if other variables were controlled, parents held less aspiration for, and spent less on out-of-school expenses for, their later-born daughters than for their sons. This alternative resource allocation suggests that parents prefer having sons to daughters in order to solve any contradictions between equality and efficiency among siblings.

(3) Disparity between college attendance and non-college attendance is affected by the adequacy of family income and this has a greater effect on the aspirations of women than it does for men. (4) Parents may attempt to equalize educational attainment among their offspring. If older sons have attended college, parents hope their younger brothers will also do so. However, this depolarizing effect worked only for males, since daughters were more likely to resemble their non-college brothers and sisters. (5) While parents' altruistic attitudes (fear of incurring a loan on behalf of their daughter) had a negative effect on the probability of their daughters attending college, it did have a positive effect on the payment of college tuition and the cost of living.

These classical findings show that inequality of educational opportunity still remains more or less constant between sons and daughters within the same family even during the era of universal provision.

* Professor, Research Institute for Higher Education (R.I.H.E.), Hiroshima University